

幼児の歌ごころをよびさますもの

相川ノブ子
谷口緑

私の園の研究

此の頃のきびしい寒さに耐えてお庭の花壇には秋植えのヒヤシンスが春を待っています。耳をすますと土の中から、根をはり芽を出す彼らの楽しい生活の歌が聞えてきます。澄み切った瞳を輝かせてピチピチとはね廻っている幼児たちを見ると、誰でも彼らを祝福したくなるものです。そうです。私たちは幼児たちが彼ら自身の裡にもっている豊かな音楽性をはっきりと感じます。そしてその音楽性がじゅうぶんに成長発達し、彼らの将来における人間性を一層輝かしいものとするようにと祈るのです。

おままごとに打興じて何やら即興歌をうたう女の子、大工さんごっこをしながら金槌のリズムにのって元気な声を張り上げる男の子。本当に子どもたちはコンコンと湧き出る「清い音楽の泉」をもっているのです。けれど心ないおとなたちの一言「変なうたね。うるさいね。オンチだね。」などによってこの泉はかき乱され、ある時には不幸にも忘れてしまうことさえあり得るのです。歌を忘れた小鳥、うたえなくなった小鳥たち——音楽の喜びを持たないあるおと

なたち——は幼い時こうした痛手を負った人たちではないでしょうか。これからの幼児たちには決してこんな憂目をみせてはなりません。幼児たちの伸びる力がじゅうぶんに育っていくよう周りを整えてあげねばならないと思います。

音楽はとかく表面の技巧的なものに拘われ易いものですが、決してそれのみに終始するものでないことは申すまでもありません。むしろその裏づけであるところの「美」への哲学にこそ真の意味で音楽をし、音楽を求める者の精進の姿があるのではないかと思えます。

幼児たちの生活の各場面において彼らの歌ごころをよびさまし、その歌ごころがそれぞれ展開され、創られてゆくと思われるものを学生たちと共に考えてみました。

(一) 実験の動機

諸文献中の研究調査によると音楽に対す

る感受性の進歩の第一条件として幼児期の生活環境があげられている。生活環境に關しては勿論保育室のみの活動ではどうすることも出来ないが、ささやかな私たちの実験を通して幼児の実態を知り、その代弁者となつて現実に即した地域社会への働きかけをしたいこと。今一つは幼児だからといってやさしい程度という安易に流れがちな習慣を打破したいこと。更に未分化な幼児たちであれば、音楽教育も総合的にこなされるべきではなからうかと思ふこと。

(二) 実験の経過

(1) 幼児の興味のありかたを考え、標題をもつた楽曲と、標題をもたない楽曲とに分け、それらと動きのリズム、言語、絵画などの表現活動との関連を見ることとした。

●選んだ曲

(イ) 狩獵

ブルグミュラー No. 6

(ロ) 清い流れ

ブルグミュラー No. 7

(イ) ソナチネ 四番 第一楽章提示部

○ ソナチネ 九番 第二、第三楽章

○ ソナチネ十二番 第一楽章提示部

○ ソナチネ十六番第一楽章第一主題

選曲の理由

○ 学生たちの学習したもの(器楽学習の初歩者も使いこなせるもの)をそのまま現場の保育に生かしたいこと。

○ (イ)、(ロ)は標題があつて表現活動の展開が容易であると思われるもの。

○ (イ)、はこのような絶対音楽はこどもにむずかしいという定説から抜けてみるために。

●対象幼児 本学付属幼稚園児

(イ) 一年保育児男女二十名(選抜法による)

意性なし)

(ロ) 一年保育児男女二十名(選抜法による)

意性なし)

(イ) 二年保育年長男女二十名(平常知能

一一〇)

●実験日時 一月十七日—一月二十七日

(2) 実験の概要

(イ) 狩獵—あらかじめこの曲による学生たちの創作話を準備し、幼児たちに適当にきかせた後発言を促し、つぎ足し話に誘導したが(伴奏として曲を弾く)断片的な発言になったので準備した話をやはり伴奏しながら話してきかせた。(話の内容省略)この後で一人がそれに刺戟を受けたと思われる短い話をした。最後にこの幼児の話を中心に「狩人さん」の遊びをした。

(ロ) 清い流れ—(イ)と同じくまず学生側

で短い話を準備した。幼児の入室時及びその話をきかせる時の伴奏として繰り返しこの曲を弾いた。続いて音楽の流れのうちに、話に出てくる水、花、草、小鳥、石、蝶の動きを幼児の自発的な表現にまかせた。小憩の後試みに再びこの曲を弾くこともは

自然に前の表現に戻り動きを楽しんだ。

(f) 絶対音楽の場合として前出の四曲による実験をやや詳しく記してみる。

(a) 第一回 ソナチネ四番第一楽章提示部に対する幼児のこたえ

○人形が髪をすいているようだ

○木の葉が散っている

○人形が踊っている

○汽車が速く走ったりゆっくり走ったりしている

○ぼくが舟を浮かしにいった

○雀がとんでいる

などの発言があり、そのうちの「雀がとんでいる」ということばからつき足し話を発展させた。(前記の要領で曲を使いながら) 話の概要は「お天気の良い日、雀たちとび廻っている。かかしさんを見つける。

かかしさんも雀たちと一しよに空へとんで行きたいと思っている。雀たちはかかしさんの所まで降りて一しよにお話しました。」

この話をなかだちとして動きのリズムへ誘導すると、かかしは一本足で立ち、雀はその間を自由自在にとび廻った。それは気の向くままにとび廻っていて細いリズムにまで合っているとは云い難いが、音楽を全身に受けて楽しんでいるというようすであった。

(b) 第二回 ソナチネ九番第二、第三楽章——のどかな田園の朝の感じ(第二楽章)を導入とし、こどもの汽車旅行を主題(第三楽章)発展していく話と、そのイメージを色彩と線に表現した絵を学生たちで準備した。しかしこどものこたえは

○わたしはバレーを見ている

○どんぐりがころがっている

○汽車にのっているみたいだ

などであったので試みに曲をいくつかに分けて弾いてその感じをきいてみたが、これに対しては答がなかったので、子どもたちは部分的に把握するのではなく曲全体から

何かを感じとるのであると思った。ついで「バレーを見ている」という発言を取り上げ「どんなに踊っていたでしょうね、皆で踊りましょう」と誘いかけるとそのことも出て何か表現の意欲を見せたが活潑な動きには到らなかった。他のこどもたちも期待のようすであったが指導者側にこどもの自発性に対する過度な拘われがあった為

に積極的な誘導の機会を逸してしまった。

そこで「どんぐりが転がっている」というのを取り「どんぐりになりましょうか」と誘導すると全体のこどもが曲に合わせて

活潑に転がる表現をし、ついで皆が一つの汽車になりつながらって動き、最後に幼児曲「どんぐりころころ」を歌い、夕方になったのでお山の家に帰りましょうと云って休息することになった。

(c) 第三回 翌日前回の曲を弾きながら「昨日はどんなにして遊んだでしょうか」と話し合い「この音楽をきいて絵をかきましよ

うか」と描画の方へ誘導してみた。すると「パレー……」の発言をした子どもはその絵を、他はどんぐりに関する絵をかいた。

汽車の絵がなかったことは最後に歌った「どんぐりころころ」が子どもたちに広く親しまれ好まれている為であろうかと思う。この歌の詞に関連した絵がほとんどであった。学生たちが準備した絵は、おしつけになることをおそれて見せなかった。

(d)第四回 ソナチネ十二番第一章を弾いてそのこたえをきいた後すぐ描画に誘導した。

- すもうをしている
- 熊が踊っている
- 山で兎が子どもに話をしている
- ヴァイオリンを弾いている
- 熊がラッパをふいている
- りすが兎と遊んでいる
- 馬が走っている
- 遠足にいったり円くなり踊っている

描画にはこれらのことばがそのまま表現されていった。

(e)第五回 これまで割合明快な感じの曲を使用した。果して幼児が曲自身の持つ感じを捉えているのかと思ひ、全然ちがった曲想をもつものを与えた。ソナチネ十六番第一章第一主題に対するこどものこたえは

○兎さんが泣いているところへ大黒様が来た

○廊下の所にママー人形がいる、一人で

○電気機関車が墜落した

○悲しい時！

○お葬式みたい

で私共の疑を解いてくれた。(今回は導入と展開整理の詳しい記述を略す)

以上の通りの経過で、各回の実験所要時間は四十分前後であった。

(三) 結果と反省

○以上の実験によって幼児は楽曲の全体から何らかを感じ取しそれと自己の生活経験とを結びつけて、絵画に言語に、ある時は動きにとその表現能力の範囲内で外に出してくるのだと思う。

○この年令段階の幼児はじゅうぶん楽曲をきき、感じ、遊びを通して一般に高い程度と思われる音楽経験を身につけることが出来るということはこのせまい実験の範囲でもじゅうぶん認識することができた。

○指導者自身が、音楽に対するやわらかい感受性と各分野の表現能力とが豊かであるほどよい。

○事前に指導者側の周到な計画(幼児の活動を予想しての)同時に機会をとらえる鋭敏な感覚が必要であること。

○日常の保育活動中にもっとたびたび音楽経験を主とする遊びを気軽にさせねばならないこと。

(四) 今後の課題

○指導法を工夫しながらこの遊びを特定のこどもに続けていく。

○この特定のグループは園外で音楽的環境について個人差の著しい幼児で組織し、個々に比較調査をおこなう。

○ある期間の後にこのグループの幼児を

普通に保育された幼児との音楽に対する感じかたの比較をおこなう。

○この小研究に興味を持つ学生は、新年度よりいよいよ現場において個々に研究工夫し、定期的に連絡を持ち、一ケ年の後に一応の線を出してみようと思う。

(和歌山信愛女子短期大学)

自由遊びにおける社会性の発達

南 沢 志 げ

.....私の園の研究.....

乳児期はおとなの中に囲まれて生活し、周りの人々から多かれ少なかれ刺激をうけて、家族の愛情のつながりの中に社会性が育まれるが、三才頃になると積極的に友だ

ちを求める心が強くなり、社会性の芽生えがはっきり見られる。将来よい社会人として、円満な人格の基礎がつけられるこの大切な時期に、幼稚園ではどんな点に留意し

たらよいか。それには幼児の社会性はどのようなに発達していくものか、これを養うよい条件は何かを知らなくてはならない。自由遊びは自発的にグループがつけられ、自然の姿で友だちとの交りがなされるので自由遊びにおける社会性の発達について研究してみたいと思う。

一、研究の方法

1. 対象は年長組(五才児)五二名、年少組(四才児)四八名計一〇〇名である。
2. 観察方法は幼稚園では、(a)遊びの種類および人数、(b)環境設定の関係、(c)人の行動などを記録し、家庭には、(a)園から帰ってからと、夏休み中の遊びと人数、(b)家族調査をお願いする。
3. 期間は五月から九月まで

二、研究の内容および結果

1. 保育プログラムの時間を記録して%を出したところ二七%が自由遊びである。この時間のしめる位置の大きいこ